内外交差点

なぜ日本の“地方”が動き出しているのか
空飛ぶ交通で変わる地域医療・防災

寶上　卓音氏（そらとぶタクシー社長） 第8／12回

皆様、こんにちは。そらとぶタクシーの寶上です。10月をもって大阪・関西万博が閉幕しました。期間中はタクシー需要も高まり、多くの事業者にとって追い風となりました。私自身、そらとぶタクシーの代表であると同時に、大宝タクシーグループの経営にも携わっています。

今回は、「万博の次に地方タクシー事業者が何を見据えるべきか」という視点からお話しします。私が今もっとも重要だと感じているテーマ――それは“地方”と空飛ぶクルマの連携です。

なぜ今、地方自治体が動き始めているのか

直近数カ月、地方自治体が空飛ぶクルマ企業と連携するニュースを多く見かけるようになりました。そらとぶタクシーを含め、空クル業界は「実証実験」から「社会実装」へとフェーズが移りつつあります。その背景には、日本の地方が抱える構造的な課題があります。

- 医療体制の弱体化（人口減少・医師不足）
- 道路インフラの老朽化
- 離島・山間部など高度医療までの距離が長い地域
- 災害時の孤立リスクの拡大

これまでの陸路中心の対策では、限界が現実化し始めているのです。「高度医療を受けられる都市部まで、患者が長距離搬送に耐えられない」「搬送時間が致命的となり、救えるはずの命が救えなかった」――。こうした事例は全国の医療現場で実際に起きています。

地域医療の“壁”を超える空の移動

私たちそらとぶタクシーは、医師会や医療関係者と意見交換を重ね、一部の緊急ケースで患者搬送を担える体制づくりを視野に入れています。空からの高速移動が加われば、「救えなかった命を救える可能性」が広がります。地域医療の限界が近づく今、空の交通は新しい医療インフラになり得るのです。

災害大国・日本に必要な“空の防災インフラ”

もうひとつの重要なテーマが「防災」です。日本は地震・台風・豪雨の常襲国。道路が寸断され、物資や人員が届かない地域が生まれるのは珍しいことではありません。そこで私たちは自治体の災害対策課と連携し、次のような構想を進めています。

＜構想例＞拠点横にメディカルバンクを設置し、有事には30分で空路出動する。搭載するものは、医療物資・医師・救命士・小型医療設備これらを最寄り拠点から空飛ぶタクシーに乗せ、迅速に被災地へ配送・派遣する。

実現すれば、支援の初動を劇的に改善できます。空路を活用した災害対応は、陸路の限界を補う新しい防災インフラです。すでに複数の自治体では、医療関係者・消防・防災担当者を交えた本格的な議論が始まっています。地方側の「本気度」は年々高まっています。

空クルが地方にもたらす具体的メリット

空飛ぶクルマの導入は、地方に以下の大きな価値をもたらします。例えば、①移動時間の劇的短縮②山間部離島などアクセス困難地域の支援③救急医療のタイムクリティカル領域での活用④孤立地域への物資・人員輸送⑤観光資源への新たなアクセスルート創出⑥ローカルタクシー事業者の新たな事業機会。

特に最後のポイントは重要です。空の交通と地上交通の連携は、地方の新しいビジネスチャンスを生み出します。

全国で進む実証実験と検討

すでに各地で以下の動きが始まっています。

- 医療搬送を想定したシナリオ検討
- 災害初動支援のシミュレーション
- 観光ルートの設計
- 地方空港・ヘリポートの活用可能性調査
- 地域タクシー事業者との連携モデルの検討

2025年を境に自治体の動きはさらに加速していきます。

タクシー × 空飛ぶクルマという新たな連携

私たちは、地上交通を担うタクシー事業者と、空飛ぶクルマ事業者が連携することで、地域に新しい価値を生み出せると確信しています。地域医療の補完、災害対応力の向上、地域経済の活性化、新たな観光動線の創出、地方交通網の再構築――。地方が動き始めている今こそ、各事業者が“次の一手”を考える絶好のタイミングです。

空飛ぶ交通は「未来の話」ではない

空飛ぶクルマはＳＦの話ではありません。あと１年と数カ月後、皆様の上空を本当に飛びはじめる航空インフラです。まもなく空飛ぶ交通は、地域課題を解決する「現実の選択肢」になります。

ローカルタクシー事業者の皆さん、一緒にこの新しい社会インフラをつくっていきませんか？